

先月、公務で長野県岡谷市のイルフ童画館を訪問する機会がありました。同館は岡谷出身の童画家、武井武雄（明治27〜昭和58）を顕彰する市立の美術館です。

武井は、童話の添え物としか見られていなかった子ども向けの絵を、「童画」として芸術の域まで高めた画家です。モダンでナンセンスな画風は、独創的で現代でもまったく古びていません。イルフ童画館の「イルフ」も「古い」をひっくり返した武井の造語で、「新しい」という意味です。

大正11年創刊の『ゴドモノクニ』を中心に活躍し、昭和初期には既に一世を風靡していた武井は、創作を始めた頃の南吉にとって雲の上の人でした。そんな南吉のために、一度だけ武井が絵を描いています。南吉が安城高等女学校で教師をしていた昭和15年3月、『ゴドモノヒカリ』第四巻第三号に童話「キヨネノキ」が載った時のことです。

同誌の編集には、南吉にとって北原白秋門下の兄弟子にあたる與田準一が関わっていました。その與田が南吉の童話を採用し、武井に挿絵を依頼してくれたのです。掲載号を手にした時の喜びを、南吉は次のように書いています。「武井武雄の美しい挿絵がついている。この有名な挿絵画家も僕の物語をよみ、その与えるイメージを描いたのだと思うと、何かこう征服したような喜びである。」（昭15・3・18）

駆け出しの作家の南吉にとって武井に絵を描いてもらうということは、まさにステータスだったのでしよう。

実は、南吉は東京外語の学生時代に、池袋にあった武井の邸宅を訪れているようで、その時の感想を「私の世界」（昭和13）という文章に綴っています。武井の家は、門扉から机や椅子などの調度品まで、武井自身がデザインしたもので、武井自身が入りの骨董品でそろえられ、全国から収集した郷土玩具も所狭しと飾られています。そんな独特な雰囲気を感じながら、



左：「キヨネノキ」挿絵 右：武井武雄（イルフ童画館提供）

「がいののに違いない」「それは武井武雄の世界」だと南吉は書いています。

人によって愛好するものは違います。南吉は「私の世界」を形作るものとして、文学ではフィリップとアンデルセン、画家ではシャガールとマチス、音楽ではショパンとシューベルトなどを挙げています。

武井武雄という強烈な個性に触れた体験は、では自分の世界とは何か？ということに南吉に考えさせるきっかけになったようです。

新美南吉記念館 遠山光嗣

みなさんの（声）を聞かせてください アンケート

- Q1 今号でよかった内容や写真があれば教えてください。
- Q2 今号を読んだことがきっかけで行動したこと、または、したいことはありましたか。
- Q3 市報で取り上げてほしい内容や企画、広報に関するご意見・ご感想などありましたらお聞かせください。

回答方法

住所、氏名、年齢、アンケートを書いて、ご送付ください。

あて先

〒475-8666
東洋町2-1 企画課
Eメール
kouhou@city.handa.lg.jp



今年（浅野）は真冬とは思えない暖かい日が続いていますね。記録的な暖冬と言われており、雪もほとんど降っていません。さて、2月は梅の花が見頃を迎えます。白、ピンク、赤の繊細な色彩の美しい花を見ることは、毎年楽しみですね。ちなみに、梅といえば、売り上げ日本一のチョコの祭典で発売された某有名パティシエの梅酒トリュフに、半田の國盛の梅酒が使われているそうですよ。

編集後記